

図書 紹介

「ゼロリスク社会」の罨

「怖い」が判断を狂わせる

著者：佐藤健太郎（サイエンスライター）

発行：光文社／〒112-8011 東京都文京区音羽 1-16-6／TEL03-5395-8289(編集部)／

新書判／264頁／価格 800円（税別）／2012年9月20日発行

われわれを襲うリスクは、歴史や経験からは教訓を引き出せないものばかりである。リスクの概念は広範囲なので、本書で取り上げられているのはその一部に過ぎないという見方もできるが、ソルビン酸をはじめとする食品添加物、車や飛行機での移動、こんにやくゼリー、農薬、代替医療、トランス脂肪酸、被ばく線量など日常生活の様々なリスクを取り上げて、日常生活レベルにおけるリスクとの付き合い方をどう考えればいいのかについて、わかりやすく解説されている。

第1章 人はなぜ、リスクを読み間違えるのか

第2章 「天然」大好き、「化学」は大嫌い・・・の罨（－真実はグレーの中に）

第3章 ゼロリスク症候群という罨－メタミドホス禍から学ぶ

第4章 「発がん」の恐怖－という罨

第5章 「狂った油」「血液ドロドロ」の罨－トランス脂肪酸について、ひと言

第6章 善意の砂糖玉・ホメオパシー－代替医療(疑似科学)の罨

第7章 「改めまして、放射能基礎講座」－放射能の恐怖、という罨

次に小見出しをみていくと、リスク過敏症と日本の停滞、医療、教育、企業－「リスク回避」に最も注力するという矛盾、誤ったリスク判断による経済・身体的損失を増やさないためにではじまり、第1章は、人はリスクを読み誤る生き物である、リスク認知因子10カ条、、こんにやくゼリーともち－バイアスの「ベテラン」と「バージン」格差、科学技術の進歩が忘れさせたリスク－「自然な〇〇」ブーム、リスク情報(=不安)を商品とするマスコミ報道、リスクの性質－ほっておくと増えていく、リスクはゼロにならない－人生はトレードオフの洗濯の連続、定性分析と定量分析－「ゼロ」幻想から脱出する方法、オバマは55歳で死ぬ？－統計の罨、左利きは短命か？－「面白い説」しぶとく生き残る、未婚者は短命か？－原因と結果のとりちがえ、データに騙されるな、分母がない話は怪しいである。

第2章は、危険な「天然」－身近に猛毒はたくさんある。「化学」に怯えすぎ、「天然」

に期待しすぎ、「自然」を謳う悪質商法、化学物質は人間の体で処理できない!?!—マスコミの罪、「合成品には副作用が!」という広告、真実はグレーの中に—食べることは同時に命を削ること、青色 1 号はどれほど危険なのか?、追いやられたソルビン酸、そして経済的損失、カビがないパンとカビが生えるパン、どっちが怖い!?!、「用量依存性」と「閾値」を知る、バランスよく食べることはリスク分散でもある である。

第 3 章は、2 つのメタミドホス事件、メタミドホス報道の罪、ゼロリスクという幻想—水にも致死量がある、有害物質を処理する体の仕組み、「ホルムアルデヒド汚染」の実際、「定性思考」から「定量思考」へ—リスク判断の面倒さから逃げるな などである。

第 4 章は、殺人油とされた「エコナ」事件、人間の体自身も発ガン物質を作っている、発ガン物質で必ずガンになるのか?、「ない」ことの証明はとてつもなく難しいなど、第 5 章は、トランス脂肪酸とは何か、天然の油脂からも摂取している、マーガリンがプラスチックに似ている??.・・トンチンカンな言いがかりなどである。

第 6 章は、乳児死亡事故の波紋、ホメオパシーとは何か、科学の目からホメオパシーを見てみると・・、ホメオパシーは排除されるべきか?、正規医療を否定—まともな治療の機会を失う危険が高いなどである

第 7 章は、原子力の話が難しく感じる理由、原子の仕組み—セシウムはなぜ数種類あるのか、3 種の放射線、内部被曝と外部被曝、細菌が放射能を分解する!?!—化学を知っていれば「あり得ない話」などである。

「危険」と「安全」は反対語として使われているが実は対語ではない。「危険・リスクがある」とは言うが、「安全がある」とは言わない。「危険」は実在するが、「安全」は実在するものではない。現代社会でリスクをゼロにすることはできないし、それを求めるべきでもない。すべてのリスクはメリットとのトレードオフであるという。何かを得るためには何かを捨てなければいけないとはよく言われるが、リスクも同じである。つまりこのリスクを避けると別のリスクが現れる、リスクは決してゼロにならない。リスク管理の分野で近年話題になった問題ほぼ網羅し、それらの何が問題であったのか、あるいは誤解されていたのかについてわかりやすく解説されており、「リスク」についての格好の入門書である (学会事務局)。